

論文

一九三〇年代のマラヤのマレー・ナシヨナリズムからみた
インドネシア

坪井祐司

キーワード

マレー人 民族主義 オランダ領東インド ジャーナリズム

はじめに

本論は、一九三〇年代に英領マラヤ・クアラルンプルで発行されたマレー語紙『マジユリス (Majlis)』の分析から、マラヤのマレー・ナシヨナリズムにとってインドネシア¹⁾がどのような存在であったのかを分析する試論である。

ムラカ (マラッカ) 海峡を挟んだマレー半島とスマトラ島は、歴史を通じて一つの海域世界をなした。この兩岸をつないだのがマレー人であり、彼らが話すマレー語は地域

の共通語となった。しかし、十九世紀後半以降、マレー半島はイギリス、スマトラ島はオランダによる植民地化が進められ、政治的に分割された。二〇世紀に入って展開されたナシヨナリズムも、両地域で別個のものとなった。このため、植民地化以降の歴史は、それぞれ別個に論じられ、関係性は明らかにされていない。

インドネシアを視野にいれてマラヤのマレー・ナシヨナリズムを考えると、二つの論点が生じる。第一には、マレー人という民族集団の広がりともマラヤという植民地領域

の不一致である。マレー人がムラカ海峽両岸を行き来する人びとであったとすれば、マラヤにおけるネイションとしてのマレー人はどのように切り取られるのであろうか。近年、「マレー人性 (Malayness)」、すなわちマレー人とは誰かという問いが重要な研究課題となっている。マラヤにおけるインドネシア人に焦点をあてることで、流動的な人間集団と領域枠組みの関係性を明らかにできる。

第二には、マラヤとインドネシアのナシヨナリズムの関係性である。マラヤとインドネシアの言語・文化的な親近性に着目し、政治的境界を越えた統合を志向する勢力がなかったわけではない。マラヤの場合、インドネシアとの統合を主張した「マレー人左派 (Malay Left)」がこれにあたる³⁾。ただし、左派は結果的に多数派の支持を得るには至らなかった。一方で、のちのマラヤの独立を主導したマレー・ナシヨナリズムの主流派に関する議論は、もっぱらマラヤのマレー人コミュニティおよび宗主国のイギリスとの関係に限定され、彼らがインドネシアをどうみていたのかは明らかにされていない⁴⁾。

そこで本論は、一九三〇年代にマレー・ナシヨナリズムを代表する新聞の一つであった『マジュリス (Majlis)』のインドネシアに関する論説をとりあげ、その認識について分析する。同紙は、一九三一年に現在のマレーシアの首

都・クアラルンプルで創刊されたマレー語紙であった。同紙の編集者アブドゥルラヒム・カジャイ (Abdul Rahim Kajai) は、マレー・ナシヨナリズムの論陣を張った人物である。同時に、彼はスマトラ出身の父を持つ移民二世であり、インドネシアとの関係も浅からぬ人物であった⁵⁾。

『マジュリス』は、言語や都市をまたいでさまざまな他の媒体を引用した。マラヤのマレー語紙にとどまらず、英語紙やインドネシア語紙も参照していたのである。この時期の新聞は頻繁な相互参照が特徴であり、全体として一つの言論空間を形成した⁶⁾。マレー・インドネシア語はムラカ海峽の共通語であり、空間は政治的境界を越えて広がった。両者の参照関係は、マラヤとインドネシアにおける知識人の相互の関係を示したものといえる。

本論の構成は以下のとおりである。第一節にて、マラヤでのマレー人概念におけるインドネシア系の人びとの位置づけを整理する。第二節にて、ムラカ海峽をまたいだ人の移動をマラヤのマレー語紙がどうとらえたかをまとめる。第三節にて、インドネシア語紙の引用をとりあげ、マラヤとインドネシアという政体の違いが双方のナシヨナリズムに与えた影響について考察する。そのうえで、越境的な人の移動とナシヨナリズムの関係性について考えたい。

一 マラヤにおけるマレー人概念の重層性

本節では、英領期のマラヤにおけるマレー人概念について整理する。マレー半島は、熱帯雨林帯に位置し、人口密度の低さと海域世界としての流動性が社会の特徴である。このため、人間集団の枠組みもまた流動的であった。マレー半島は、歴史的に移民を受け入れるフロンティア地域であった。ムラカ海峽は東西交易の要衝であり、南シナ海、インド洋から商人を集めて混成社会が形成された。

「マレー」の原語「ムラフユ (Melayu)」とはスマトラ南部の地名であり、マレー人はムラカ海峽両岸（マレー半島、スマトラ島）を往来する交易の民であった。彼らの言語・マレー語は海峽の交易のための共通語となり、外来の商人たちにも使用された。とくに、インド洋から到来したイスラム商人はこの地で大きな影響を持った。十五世紀のムラカの繁栄以降、島嶼部沿岸地域にはイスラム教が広まり、民族的には多様性を保ちながら、マレー語とイスラム教を共有する交易空間が生まれた。これをマレー・イスラム世界と呼ぶ。この結果、マレー語を習得したムスリム移民もマレー人とみなされるようになった。マレー人という枠組みは、多様な出自を持つ人びとが参入したために流動性を持った。

十九世紀にマレー半島の植民地化を進めたイギリスは、ヨーロッパで発展した人種 (race) という概念を導入した。ここでの人種とは、生物学的な概念ではなく、現在の民族に近い社会集団を指す概念であった。植民地行政の一環として行われたセンサス (人口調査) において、人口は人種に分類された。ヨーロッパ人に加えて、マレー人、華人、インド人が主要な人種の範疇であった。しかし、それぞれの人種も複数の集団からなっていた。マレー人種は、厳密には「マレー人とマレー群島の現地人 (Malays and natives of the Malay Archipelago)」という分類範疇であり、マレー人にくわえて、ジャワ人、アチエ人などマレー群島 (現在のインドネシアとほぼ重なる) 出身者が含まれた。マレー人とは、狭義 (地元民としてのマレー人) と広義 (外来者を含めたマレー語話者のムスリム) の二つの意味を持った。

人種は、イギリスの植民地統治において重要な枠組みであった。人種ごとに政策が立てられたためである。英領期、マレー半島には中国、インドから多数の移民が到来し、マレー人、華人、インド人からなる「複合社会」が形成された。華人、インド人は移民労働者として管理される一方、マレー人「現地人」とみなされ、「親マレー人政策 (Pro-Malay policy)」と総称される保護の対象となった。マレー半島

一九三〇年代のマラヤのマレー・ナシヨナリズムからみたインドネシア（坪井）

におけるイギリスの統治はマレー王権を通じた間接統治であり、名目上はマレー王権が主権者としたマレー州 (Malay State) であつた。⁹⁾ このため、マレー人はマレー諸州では行政的優遇を受けたのである。

この政策の名目は現地人を移民から保護することであつたが、対象となるマレー人のなかにはインドネシア系の移民が含まれた。彼らは、センサスで定義された公的なマレー人種に含まれたためである。半島西南部のムラカ海峽沿岸地域は、もともとスマトラ系の移民が多かつた。さらに、十九世紀に入つても、オランダの支配拡大にともなうスマトラの混乱により、多くの人口流入が起こつた。二十世紀に入ると、ジャワ人が労働者として半島に移住してきた。¹⁰⁾ オランダ領東インドの成立とともに、人口過多のジャワから外島への移住の動きが起こり、その一部がマラヤにも到来したのである。

特にインドネシア系マレー人が多かつたのが『マジュリス』の発行地であるスランゴル州であつた。河川を単位に社会が形成されたマレー世界にあつて、スランゴルは大河川を持たないフロンティアであり、王権も十八世紀にブギス人により建てられた。¹¹⁾ 十九世紀半ばの錫ラッシュにより、豊富な錫鉱床を持つこの地に華人移民が殺到し、スランゴルは英領期に一気に経済的な中心となつた。スランゴルは、

マラヤのなかでも移民の比率が高い州であつた。

中心都市クアラルンプルは、英領期に急速に発展した典型的な植民地都市であつた。英領期以前の歴史はほとんどなかつたが、錫鉱床の開発により大量の移民を集めて急拡大し、スランゴル州の州都となつた。人口は、華人、インド人がマレー人を大きく上回つていた。くわえて、マレー人もまた十九世紀以降に移住した人びとであり、錫採掘や周辺でのコメや野菜の栽培に従事したスマトラ出身者であつた [坪井二〇〇四、Abdul Razzaq 2018]。『マジュリス』の編集者カジャイの父もスマトラ・ミンカバウからの移住者であり、移民二世という点でクアラルンプルのマレー人の典型であつた。

イギリス当局もマレー系移民の存在を認識しており、センサスでは「外来マレー人 (Foreign Malays)」を地元のマレー人とは区別しようとした。一九三一年のセンサスでは、マレー人種を「マレー人」と「他のマレーシア人 (Other Malaysians)」に分けた。この結果、スランゴル州ではマレー人の約四六%がインドネシア系の出自を持つ「他のマレーシア人」であつた。¹²⁾ ただし、この数値は自己申告に基づくものであり、客観的な指標とはいえない。実際、スマトラ出身者の多くがマレー人を称したことが報告書で指摘されている。これは、文化的に近いスマトラ出身者がマレー

人に同化しやすかったというだけではない。「移民の側に出自をあかすことに強い抵抗があり、スマトラからの移民は『外来』であることを隠した方が有利であると感ずる者が多い」ためでもあった [Census 1931: 76]。

マレー半島におけるマレー人は、さまざまな状況に応じて、絶えざる移民の到来と同化を通じて形成された。マレー人という人間集団がマラヤという政体の領域を越えて移動しており、イギリスの人種概念ではうまく切り取ることができなかった。このマレー人の多様性・重層性と移民の存在は、ネイションを作ろうとするナショナリストにとって大きな問題となるのである。

二 マラヤのマレー・ナショナリズムとインドネシア人の位置づけ

『マジュリス』とマレー・ナショナリズム

本節では、マラヤのマレー・ナショナリズムがインドネシアからの移民をどうとらえていたかをマレー語紙『マジュリス』の議論をめぐって検討する。

『マジュリス』は、一九三一年一月十七日にクアラルンプルで創刊された。官報によると、創刊号の発行部数は二千部とされる [Proudfoot 1985: 11]。当初は週二回の発

行であったが、一九三七年三月以降週三回となった。初代編集者カジャイは、「マレー語ジャーナリズムの父」とも呼ばれたマレー・ナショナリズムの論客であった。『マジュリス』は一九三〇年代のマレー・ナショナリズムの一翼を担った新聞と位置づけられる¹⁴⁾。

『マジュリス』創刊号の一面では、「緒言 (Pendahuluan)」として、同紙の創刊の目的がうたわれた。ここでは、同紙がクアラルンプルにおける最初のマレー語紙であることを強調し、民族 (bangsa)、祖国 (watan)、宗教 (agama) のために奉仕することを誓った。「(マレー) 民族」が前面に出されたことは、同紙のマレー・ナショナリストとしての性格を示している [Majlis 1937.12.17: 1]。

しかし同時に、記事はマラヤにおけるマレー人の分裂状況を指摘した。マレー人がクダ、ジョホール、クランタン、シンガポールなど、王権や地域ごとに分かれてしまっているというのである。スランゴル人はムラカで「よそ者」とみなされ、トレンガヌ人はペラで「よそ者」とされている。マレー人がばらばらとなって混乱が生じ、外来民族から取り残されてしまった。記事は、「我々が同じマレー人をよそ者と地元民とに分けるならば、マレー人は団結、交流ではなく離散してしまう」と指摘し、「意見や教訓を導くのは、マレー、祖国、宗教以外にない」として、マレー人の団結

一九三〇年代のマラヤのマレー・ナシヨナリズムからみたインドネシア（坪井）

を訴えた [Majlis 1937.12.17: 1]。

第三号では、華人、インド人の活動に懸念が示され、對抗心があらわにされている。社説「マレー人の栄光は外来民族のなかに埋もれて名ばかりに」によれば、「外来民族 (bangsa asing)」の到来により、「マレーの国 (negeri Malayu)」とは名ばかりとなり、名前すら消えかねない状況にある。マレーの国の名を守り、土地の子 (putera bumi)、現地人 (anak negeri) が「マレー」であり続けねばならないと主張された [Majlis 1931.12.24: 1]。

こゝで強調されているのはマレー人が「現地人（英語では natives）」であるという点である。背景には、前節で述べた親マレー人政策があった。これは現地人たるマレー人を行政的に優遇する政策であるが、移民とみなされていた華人、インド人も一九三〇年代になると徐々に定着傾向を見せ、マラヤ生まれの移民二世、三世が増えた。彼らは、「マラヤ人 (Malayan)」を称し、マレー人と同等の権利を要求した。社説では、国名を「マラヤ」とし、地元民を「マラヤン」とすることを強く主張していると指摘した。マラヤン民族が土地の子のなかに入ろうとしていると反発し、現地人はマレー人、国の名前はマレーであると強調した [Majlis 1931.12.24: 1]。現地人としての権利を持つのはマレー（血統）か、マラヤ（出生地）かという論点

は、戦後にまでもちこされる重要な課題であった。マレー・ナシヨナリズムは、マレー人が現地人であることを一貫して主張したのである。

マレー人の現地人性をめぐる論争は、新聞同士で言語をまたいで行われた。クアラルンプルでは、英語紙『マレー・メイル』が非マレー人（マラヤン）の意見を代表し、『マジュリス』がマレー人を代表した。たびたびマレー人の行政的特権を批判する『マレー・メイル』に対し、『マジュリス』は逐一反論した。

論争の争点の一つが「外来マレー人」の存在であった。彼らは、公式にはマラヤの現地人としてのマレー人に分類されるにもかかわらず、マラヤ外（インドネシア）の出自を持つ。英語紙は、華人やインド人と同様に外来者であるはずのインドネシア系の人びとがマレー人として権利を得ていることを批判した。

一九三二年三月、インドネシアからの移民が華人、インド人移民よりも権利を得ているという批判に対して、『マジュリス』は、「なぜ『マレー・メイル』が半島マレー人とインドネシア人、地元のマレー人と外来マレー人との間の状況について言及したのか理解に苦しむ」と反論した。そして、「彼らは血統、言語、宗教その他を共有する同胞であり、統治する民族が違うからといってわかれることは

ない」として、マレー人とインドネシアの人びとの「同胞性」を強調した。記事によれば、パタニはシャム、インドネシアはオランダ、ティモールはポルトガル、半島はイギリスの統治下にあるが、人々の同胞関係は永遠である。一方で、華人は半島で世代を経ても中国から来たばかりの新参の華人と交わろうとする。逆に、人間の同胞関係は一つの民族の統治によってのみ生まれるのではない。セイロン、香港、海峡植民地、キプロス島などはイギリスの植民地だが、各地の人々は同胞ではない。香港の華人はセイロンで権利を持つわけではなく、その逆もかりである。『マジュリス』は、政治的境界と民族の同胞関係に關係はないと主張し、インドネシア系移民もマレー人であると擁護したのである [Majlis 1932.3.11: 1]。

マレー人コミュニティ内部の分裂

同時に、『マジュリス』の「緒言」が触れたように、マレー人自身が「外来者」を区別しようとする意識もたびたび議論の対象となった。

一九三二年五月、「ブルリスのペラ人」を名乗る読者が『マジュリス』に投書し、ペラのペラ人 (Perakeans)、スランゴルのスランゴル人 (Selangoreans) などに細分化されることにより、マレー人の名が失われてしまっている

と指摘した。筆者は、マレー人自身がマレー民族を分割したがつていように見えると主張し、「マラヤン」もやがてマレー人に受け入れられてしまう時が来るのではないかという懸念を示した [Majlis 1932.5.19: 7]。

『マジュリス』の創刊直後の一九三二年に盛んにとりあげられたのが、ヌグリスンピラン州で西スマトラに出自を持つミンカバウ人がマレー人の定期市への参加を拒否されたという出来事であった。ムラカ海峡を挟んでスマトラと対面するヌグリスンピランは、ミンカバウ人により建国された王権を持ち、住民の多くがミンカバウの出自である。ミンカバウ人の独自の母系制の慣習もヌグリスンピランに入ってきている。十九世紀以降、新たにスマトラから移住してきたミンカバウ人も多く、マレー人とインドネシア系移民の境界が特に曖昧な地域であった。定期市は、イギリスが現地人の経済振興のために奨励していたもので、参加者が「現代人」であるかどうかが問われたのである。

ヌグリスンピラン州に隣接し、同じくミンカバウ系の住民が多いムラカ在住の筆名アスマラ (Asmara) は、この問題でたびたび『マジュリス』に寄稿した。一九三二年十一月に「半島マレー人とインドネシア・マレー人…ミンカバウ人は排除される？」という記事を寄稿し、初めて

一九三〇年代のマラヤのマレー・ナシヨナリズムからみたインドネシア（坪井）

この問題をとりあげた。アスマラは、「ミナンカバウ・マレー人とヌグリスンピランの現地人を区別するのは、王権の出自がミナンカバウであり、慣習もまた母系制のミナンカバウのものであることを忘れて」と指摘した。そして、「半島のウンマは、マラヤン民族をこの国に受け入れるよりもインドネシアの同胞たちを受け入れたい」と続けた。彼は、インドネシア・マレー人は半島マレー人よりも発展しており、マラヤの同胞の手下となるべきだと主張した。そのうえで、インドネシアの新聞にこの件で声を上げるよう訴えたのである [Majlis 1932.11.17: 1]。

さらにアスマラは翌月の寄稿において、マラヤ各地のマレー語紙がこの問題に高い関心を寄せたと強調した。さらに、アスマラが指摘したのは、土地に関して、インドネシア人はマレー人と同様の権利を持つという点であった [Majlis 1932.12.8: 1]。これは、一九一三年に制定された「マレー人保留地法 (Malay Reservation Enactment)」を指す。この法律は、ゴム栽培の急速な拡大のなかで、マレー人の土地流出を防ぐために制定されたもので、ここでマレー人が初めて法的に定義された。そのなかで、マレー人は、「マラヤの人種のいづれかに属し、マレー語もしくはマラヤのいづれかの言語を日常的に話し、イスラム教を遵守するもの」とされ、インドネシア系移民を含むことが

確認された。^①

同時に、アスマラは、半島マレー人は外来民族よりも数が少ないことも指摘する。一九三一年センサスでは、現地人であるはずのマレー人は、すでに数のうえでも華人、インド人に凌駕されていた^②。インドネシア人を含めることでマレー人の数を増やし、ともに「マラヤのマレー人」として権利を得ることが両者の利益となると訴えたのである [Majlis 1932.12.8: 1]。外来民族の台頭に危機感を抱くアスマラは、インドネシア人を受け入れることでマレー人の数を増やして、華人、インド人に対抗する方策を思い描いたのである。

アスマラは、翌一九三三年二月に「半島マレー人とインドネシア・マレー人」という記事を寄稿した。記事によれば、シンガポールで「常にインド・中国系の利益を代表する新聞」である『マラヤン・デイリー・エクスプレス (Malayan Daily Express)』がシンガポールの土地の子 (son of the soil) を名乗る人物の論説を載せた。引用によれば、マレー人とは、マラヤに祖先をもつマレー人であり、スマトラやジャワで生まれてマラヤで教育を受けたスマトラ・マレー、ジャワ・マレー人ではない。このため、マラヤ生まれの華人、キリスト教徒、インド人はマラヤ外の生まれのスマトラ、ジャワ・マレー人よりも多くの権利を持つべきと主張

したのである。対してアスマラは、「数が少なければ華人やインド人に追い立てられてしまう」として、インドネシアから多くの人が定住することを歓迎した。記事によれば、マラヤでは国民が形成されておらず、流動的な移民、商人からなる。このため、インドネシア人をマラヤに迎え、新たなマレー民族を作ることが意識されたのである [Majlis 1933.2.6: 1]。

民族の政治と外来マレー人をめぐる論争

『マジユリス』の社説でも定期市の問題は扱われたが、その内容はマラヤンへの対抗のためにマレー人の団結を訴えるものであった。一九三二年十一月の社説「分裂の芽が育っている」では、マレー人の定義の議論のなかで「ミンカバウ人をはじめとする外来マレー人が除外されることに懸念を示した。この分裂は外来マレー人と地元マレー人の間のみならず、地元民同士でも起こるに違いない。真の脅威は華人であるとして、ミンカバウ人を排除する決定を下した定期市の委員会を批判する一方で、地元民の度量も必要であると主張した。そして、マラヤン民族によるインドネシア・マレー人に対する批判を防ぐためにも、外来マレー人と地元マレー人に分けるすべての壁を捨て去らねばならない」と強調した [Majlis 1932.11.17: 5]。

翌月の社説「マラヤンは外来マレー人をフアリサイ派にしたがっている」がとりあげたのは、海峽植民地においてマレー語学校が無償なのに対して、華語学校が有償であることへの華人からの批判であった。ジャワ人などが無償で教育が受けられるのは不公平という主張である。これに対して、記事は、マレー人がマレー諸島の現地人であることを強調するとともに、インドネシア系の移民が半島に来たときにことさらに権利を要求することはなく、政府は彼らのための保護局^⑨を設けなかったと主張した。彼らが行政上マレー人であることを強調したのである [Majlis 1932.12.22: 5]。

一九三三年十一月には、再び『マジユリス』と『マレー・メール』との論争が起こった。『マレー・メール』がピラト (Pilate) という筆名の人物による「マレー人とは誰か?」という投書を掲載したのである。彼は、マレー人は半島の原住民ではないと主張した。半島の原住民は現在オラン・アスリ (Orang Asli) と呼ばれる人々であり、マレー人はマラヤの土地の子ではない。筆者は、五〇年前スランゴル州にいたマレー人は二万人に過ぎず、一九三一年センサスの時点でも十二万あまりのマレー人のうち三万三千人は他所生まれであると指摘した。マレー人の多くは、華人と同様に、マレー半島に最近やってきた新参者に過ぎないと

一九三〇年代のマラヤのマレー・ナシヨナリズムからみたインドネシア（坪井）

強調したのである。とくに、近年になってスマトラ、ジャワ、バンジャル、ブギスなどのマレー諸島の人々がやってきて、「土地の子」としての権利を得ていると批判したのである [Majlis 1933.11.23: 5]。対して『マジュリス』は、華人やインド人がこの地にやって来た時にはマレー人はすでに旗を掲げており、所有権は世界に認められていたと反論した [Majlis 1933.11.20: 5]。

その後も、『マジュリス』では、散発的にインドネシア人を現地人とみなすことへの批判に対する反論が掲載された。一九三四年十一月の社説「インドネシア・マレー人はマラヤンに疑われている」では、マラヤンの批判に対して、インドネシア・マレー人が王権に忠誠を誓って開発に貢献したことを強調し、彼らのようになりたければその道程を学ぶべきであると訴えた [Majlis 1934.11.25: 5]。

一九三六年五月の社説「一つの国家、一つの民族、一つの利益」では、ペナンで「外来民族の代弁者として知られる」著名な英語紙が、外来民族にマレー諸州の行政職の扉を閉ざすと言明した高等弁務官の発言を批判したことをとりあげた。その新聞は、マラヤに住む外来民族も利益を共有する民族の一部であると主張し、スマトラ人やジャワ人をマレー人とみなすならば、この地で生まれ、この国を祖国としている外来民族も地元民とみなすべきと主張した。

『マジュリス』は、インドネシア系住民はマレー王権に忠誠を誓い、マレーの慣習を守り、イスラムを奉じているのに対して、外来民族がマレー州の王権に忠誠を誓うのは口先だけに過ぎないとして、両者の違いを強調した [Majlis 1936.5.18: 5]。

インドネシア人がマレー人に含まれるかは、マレー人コミュニティ内部にも異論はあった。しかし、この問題はマレー人と華人など非マレー人との政治的権利をめぐる対立の一部でもあった。英語紙との論争のなかで、マレー語紙は結束してインドネシア人がマレー人であることを強調した。彼らのマレー人性は、民族の政治のなかで確認されたのである。

三 マラヤとインドネシアのナシヨナリズムの交錯

インドネシア語紙との論争

本節では、『マジュリス』によるインドネシア語紙の引用をとりあげ、同紙がインドネシアの人びとのマラヤに対する視線をどう受け止めたのかを示す。マレー語はマレー・イスラム世界の共通語であり、現在のインドネシア語のともなった。この時期のマラヤの出版活動が主にジャワイ（アラビア文字）で行われたのに対して、インドネシアで

は早い段階でローマ字が普及していたという違いは見られたが、言語は共有されており、相互に参照・対話が可能であった。ただし、政体を異にする両者の認識は異なるものであった。

『マジユリス』が特に引用したインドネシア語紙は、北スマトラ・メダンで発行されていた『プワルタ・デリ (Pewartar Deli)』であった。メダンは、スマトラにおける植民地経済の中心であり、出版の中心でもあった。メダンの海峡の対岸であるペナンとの間の人の往来も盛んであり、そこから出版物の交流も生じたと考えられる。

一九三三年五月十一日の『マジユリス』の社説は、『プワルタ・デリ』を「半島の動きやニュースを観察するのがとても好きなインドネシアの新聞で、半島の議論に加わってこなかったためしがない」と形容した。記事によれば、『プワルタ・デリ』は、一九三三年初めにペナンのマレー語紙『ブニプトラ (Buniputera)』と半島マレー語とインドネシア・マレー語に関して論争を行った。そして、四月三〇日、五月一日に「マラヤの新聞に対するインドネシアの影響力」という記事を掲載した。この記事は、半島のマレー語紙は政府に関心を持たれていない、イギリス人によって印刷されている、英語紙、華語紙からニュースを引用しているなど、マレー語紙の影響力を低くみる論評を複数含ん

でいた [Pewartar Deli 1933.4.30; 1933.5.1]。これに対して『マジユリス』は、政府は職員にマレー語紙の翻訳をさせており、政府は関心を持ってマレー・ウンマの意見を聞いていること、同紙が自身の印刷所を持っていること、英語紙から引用をしているが、華語紙からニュースを引用したことはないことなど、逐一反論した [Majlis 1933.5.11: 5]。

さらに、一九三四年二月十二日の社説「インドネシアと半島」では、『プワルタ・デリ』における筆名MMによるマラヤに関する論説が取り上げられた。ここでも、『ブニプトラ』紙との論争が起こった。MMの論説は、インドネシアにおける国民党や共産党のような政党がなく、政治意識が低いとマラヤを批判する内容であった。『マジユリス』は、MMが「遠くから眼鏡越しに見ただけ」で、「半島の人民の真実をとらえていない」と反発した。インドネシアのような反植民地運動がないとはいえず、イギリス帝国主義に服従していると考えるべきではない。そして、批判がいかなるものであれ、マレー人とインドネシア人が宗教、血統、言語を同じとすることは忘れるべきでないと逆批判したのである [Majlis 1934.2.12: 5]。

前記の社説と同じ号の『マジユリス』では、筆名A・Nという人物が「インドネシアと半島」という記事を寄稿

一九三〇年代のマラヤのマレー・ナシヨナリズムからみたインドネシア（坪井）

し、MMに対する反発を示した。記事によれば、インドネシアと半島の人々は民族、言語、宗教を共にするが、政治的には別の政府のもとにある。マラヤの人びとはインドネシア人を純粋な同種の同胞とみているが、インドネシアの書き手はこの世界をオランダ製の政治の眼鏡でみて、イギリス統治下のマラヤ政治を批判する。これは「余計なお世話 (Mind your own business)」だというのである。さらに筆者は、マラヤとインドネシアの政治的な状況や認識の違いを指摘した。『プワルタ・デリ』でMMが夢見ている独立は、イギリス帝国内では必須の要素ではない。カナダ、オーストラリア、南アフリカは自治領となった。多くのカナダ人はフランス系、南アフリカはオランダ系である。大英帝国は広く、領内の多くの国家・民族の文明や発展の段階は多様であるため、各民族・国家は広い世界のなかで彼らにふさわしい地位についてよく観察・比較している。一方で、インドネシアは、経済状況を改善しなければ、オランダに解放されても経済が弱体化しすぐに他国に支配される可能性がある。マラヤでも、「半島が中国の十九番目の省になりたくなければ」、経済を進展させねばならない。そして、「マラヤが華人に占領されたら、スマトラの政治の景色も変わる」として、イギリスよりもマラヤンと対決することが我々 (Orang Kita) マラヤのマレー人とイン

ドネシア人の双方を指す) の利益であると訴えた [Majlis 1934.2.13: 6]。

一九三四年十一月、『マジュリス』は再びMMの論説を引用した。同じくメダンの『シナル・デリ (Sinar Deli)』紙において、独立していない民族は、保護領としていくら発展していたとしても、世界的にみれば独立した民族より水準が低いと論評したというのである。インドネシアとマラヤの状況を対比したものである。対して『マジュリス』は、マレー半島はイギリスの保護下にあり、世界的にみて政治的關係の権利もイギリス民族の手に握られていることを認めながらも、もし必要なら半島の利益に関して申し立てる権利を持っており、政治的關係は運動のみで築かれるものではないと主張した。半島には政党が一つもないが、政府とマレー民族との間には信頼関係があり、マレー民族は「独立²⁰⁾」しているのだと主張した [Majlis 1934.1.4: 5]。

一九三七年一月にも、『マジュリス』の社説は『プワルタ・デリ』の記事をとりあげられた。インドネシア人ジャーナリストが半島のマレー語はインドネシア語よりも質が低いと述べたというのである。その理由は、イスラム教に影響され、半島マレー語にはアラビア語の語彙が多いというものであった。記事は、インドネシア人ジャーナリストがスルタン・イドリス師範学校 (Sultan Idris Training

College)⁽²⁾を訪れ、生徒たちは監禁された馬のようだと批判したとも指摘した。そして、「インドネシアの友人たちはこのような批判が双方に利益をもたらすことはないと思うべきである」と強調した [Majlis 1937.1.11: 7]。上記の記事の中には、マラヤがインドネシアからの移民の流入に頼っているとも指摘された。両地域間の人的交流がインドネシアからマラヤへという一方的なものであったことで、マラヤのマレー語紙はインドネシア側が優越感を持っていると認識していた。

一連の記事からは、インドネシア側からのマラヤを見下す記事に対して、『マジユリス』などマラヤのマレー語紙が反論する構図が見える。インドネシアのナシヨナリズムの高揚は自意識の高まりをもたらした反面、マラヤの状況をナシヨナリズムの未発達とみなす認識があったことがうかがえる。新聞の引用からうかがえる両者の関係は良好とはいえず、むしろ対抗意識がみられたのである。

民族組織の設立と植民地の枠組み

一九三〇年代後半のマラヤのマレー・ナシヨナリズムの課題となったのは、マレー人による政治組織の設立であった。そこでは、加入資格としてのマレー人の定義が再び問題とされ、インドネシアとの関係にも焦点が当たった。

まず問題となったのは、マラヤにおけるインドネシア人の組織の結成であった。政治組織の点ではインドネシアの方が先行していたため、マラヤのインドネシア人の組織化が試みられたのである。一九三六年九月、この時点で『マジユリス』からシンガポールの『ワルタ・マラヤ』へと移っていたアブドウルラヒム・カジャイは、スランゴール州におけるマラヤ・インドネシア協会の結成について報じている。既述の通り、同州では、インドネシア系の人口は多かった。結成のための会議の議長はクアラルンプル近郊ウル・ゴンバクの村長で、八十人のインドネシア出身者が出席したという [Majlis 1936.9.28: 8]。

一九三〇年代後半になると、マラヤでも州単位のマレー人協会が次々と立ち上げられた⁽²⁾。ただし、協会は州単位の規模にとどまり、マラヤ全体でのマレー人協会設立の動きは挫折し、第二次大戦後に持ち越された。最大の要因は、マレー人としての入会資格をめぐって各州の代表が一致できなかつたことである。マレー人性は重層的であり、地域差も大きかった。インド系、アラブ系のムスリムや、インドネシア系の人びとがマレー人協会に加入できるかどうかは重要な論点であった [Roff 1994: 235-247]。

一九三九年七月、『マジユリス』は社説で「インドネシア人とはだれか？」と問うた。これは、ペナンにおけるイ

一九三〇年代のマラヤのマレー・ナシヨナリズムからみたインドネシア（坪井）

インドネシア人組織の結成をうけたものであった。記事によれば、その目的は「インドネシア民族主義運動精神をもたらすため」であったが、マラヤのインドネシア・マレー人協会の組織は望ましくない。なぜなら、インドネシア人とマラヤのマレー人に違いはなく、「この国のマレー人の九〇％近くはスマトラ、バジャウ、ブギスなどインドネシアの出自をもつか、もしくは混血者」のためである。マラヤのマレー人と血統と宗教、慣習を共有する民族であり、違いは全くないというのである [Majlis 1939.7.12: 7]。

記事は、マレー人を細かく分けてしまうことの危険性を強調する。民族として弱くなってしまうためである。マラヤでは、現在は外来マレー人を分けることをしなくなったため、ペラ、スランゴル、パハン、シンガポール、ペナンでマレー人協会が結成され、一つのマレー民族のための場が立ち上げられた。インドネシア国民党などのインドネシアの民族主義組織もまた、インドネシアのマレー民族を一つの方向性に向けている。さらに、マラヤにおけるインドネシア人がマレー人と同等の権利を持つことも強調した。スランゴル・マレー人協会でも、マレー人を「マレー諸島周辺に出自を持つマレー民族」として、インドネシアのマレー人も含めている。このため、インドネシア人がマラヤで別個の組織を立ち上げる必要はないと結論付けたのであ

る [Majlis 1939.7.12: 7]⁽⁸⁾

一九三〇年代後半、マレー人の民族組織の立ち上げに進んだとき、マラヤとインドネシアという政体の違いがふたたび浮き彫りになった。政治的な運動としてナシヨナリズムが展開される場合、人々の文化的共通性よりも、運動が働きかける政治単位の違いが強調された。マラヤとインドネシアのナシヨナリズムは容易に交わらず、対抗意識を抱えながら別個に発展したのである。

おわりに

本論は、一九三〇年代のマレー民族主義者からみたインドネシアの位置づけを検討した。本論で明らかになった事は以下の点である。

第一に、インドネシアの存在は、マラヤのマレー人にとって、「現地人性」を曖昧にした。マレー人のなかにもインドネシア系の人びとを外来者として区別する認識が存在し、華人など非マレー人は彼らを引き合いに出して自らの権利の正統性を主張した。これに対して、マレー語紙はマラヤンの主張に反駁する過程でインドネシア人のマレー人性を強調した。この議論を通じて、インドネシア人はマレー人に含まれることが確認された。

第二に、言語を共有するインドネシア人およびインドネシア語紙に対して、『マジユリス』などマラヤのマレー語紙は常に関心を払っていた。とくに、メダンのインドネシア語紙は常に参照しており、ときに政治的境界を越えた論争が生じた。

第三に、メダンのインドネシア語紙とマラヤのマレー語紙は相互に参照しあっていたが、その関係性は協調というよりも独立的で、ときに対立を含むものであった。インドネシア側からマラヤ側を低くみる言説にマラヤ側が反発したのである。さらに、民族組織の結成にあたって、マラヤのマレー人とインドネシア人之间には溝があった。これは、言語を共有し、文化的な近接性があるとはいえ、マラヤとインドネシアという別の政治体制のもとで発展したナシヨナリズムが必ずしも目的を共有できなかったことも示している。

マラヤのマレー・ナシヨナリズムからみて、インドネシアおよびインドネシア人は、異物であり続けた。重層的なマレー人性から均質なネイションを構想するにあたり、人間集団と領域の不一致が生じたとき、マラヤという領域の方がより強力であった。そのため、マラヤとインドネシアのナシヨナリズムは交わらず、『マジユリス』はインドネシア移民を同化させる形でマラヤのマレー人を作る方向へ

と向かった。ただし、マレー人の越境性は、公的なマレー人概念を揺るがす要素としてその後も残っていくのである。本論はマラヤ側の資料に限定されたものであり、インドネシアからみたマラヤについては触れられず、両者の関係の全体像は明らかにできなかった。これについては、今後の課題としたい。

謝辞…本研究はJSPS科研費JP一七K〇三一五六の助成を受けたものです。

史料

Majlis, Kuala Lumpur. (シンガポール国立大学中央図書館所蔵マイクロフィルム)
Malay Mail, Kuala Lumpur. (マレーシア国立文書館所蔵)
Pewartu Deli, Medan. (インドネシア国立図書館所蔵マイクロフィルム)

参考文献

Abdul Latiff Abu Bakar. 1984. *Abdul Rahim Kajai: Martawan dan Sassterawan Melayu*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
———. 1985. "Akhar, Desentralisasi dan Persatuan

- Negeri Melayu,” In *Sejarah Masyarakat Melayu Modern*, edited by Khoo Kay Kim, 130-160. Kuala Lumpur: Penerbit Universiti Malaya.
- Abdul-Razzaq Lubis. 2018. *Sutan Puasa: A Founder of Kuala Lumpur*. Penang: Areca Books.
- Abdul-Razzaq Lubis and Khoo Salma Nasution. 2003. *Raja Bilah and the Mandailings in Perak: 1875-1911*. Kuala Lumpur: MBRAS.
- Aljunied, Syed Muhd Khairudin. 2015. *Radicals: Resistance and Protest in Colonial Malaya*. Dekalb: Northern Illinois University Press.
- Ariffin Omar. 2015 (1993). *Bangsa Melayu: Malay Concepts of Democracy and Community, 1945-1950 (2nd edition)*. Kuala Lumpur: SIRID.
- Barnard, T. P(ed). 2004. *Contesting Malyness: Malay Identity across Boundaries*. Singapore: Singapore University Press.
- Emanuel, M. 2010. “Viewpapers: The Malay Press of the 1930s.” *Journal of Southeast Asian Studies* 41(1), pp. 1-20.
- Hamed Mohd. Adnan. 2002. *Direktori Majalah-majalah Melayu Sebelum Merdeka*. Kuala Lumpur: Penerbit Universiti Malaya.
- Hirshman, C. 1987. “The Meaning and Measurement of Ethnicity in Malaysia: An Analysis of Census Classifications.” *The Journal of Asian Studies* 46(3), pp. 555-582.
- Khazin Mohd. Tamrin. 1984. *Orang Jawa di Selangor*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Khoo Kay Kim. 1984. *Majalah dan Akhbar Melayu Sebagai Sumber Sejarah*. Kuala Lumpur: Penerbit Universiti Malaya.
- Kratoska, P. H. 1983. ‘Ends that We cannot Foresee’: Malay Reservation in British Malaya. *Journal of Southeast Asian Studies* 14(1), pp. 149-168.
- Maier, H. 2010. “The Writings of Abdul Rahim Kajai.” *Journal of Southeast Asian Studies* 41(1), pp. 71-100.
- Milner, A. C. 1995. *The Invention of Politics in Colonial Malaya*. Cambridge: Cambridge University Press.
- . 2008. *The Malays*. Malden: Wiley-Blackwell.
- Parmar, J. N. 1960. *Colonial Labor Policy and Administration: A History of Labor in the Rubber Plantation Industry in Malaya, c.1910-1941*. New York: J. J. Augustin.
- Proudfoot, I. 1985. “Pre-war Malay Periodicals: Notes to Roff’s Bibliography Drawn from Government Gazettes.” *Kekal Abadi* 4(4), pp. 1-28.

- Roff, W. 1994[1967]. *Origins of Malay Nationalism 2nd Edition*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Siti Rodziah Nyan. 2009. *Akhar Saudara: Pencetus Kesedaran Masyarakat Melayu*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Vieland, C. A. 1932. *British Malaya: A Report on the 1931 Census and Certain Problems of Vital Statistics*. London: Crown Agents for the Colonies.
- 左右田直規二〇〇五「植民地教育とマレー民族意識の形成——戦前期の英領マラヤにおける師範学校教育に関する一考察」『東南アジア—歴史と文化—』三四号、三—三九頁。
- 坪井祐司二〇〇四「英領期マラヤにおける「マレー人」枠組みの形成と移民の位置づけ——スランゴール州のプランフルを事例に——」『東南アジア—歴史と文化—』三三三号、三—二五頁。
- 二〇一六「一九三〇年代初頭の英領マラヤにおけるマレー人性をめぐる論争——ジャウイ新聞『マジュリス』の分析からマジュリス」『東南アジア—歴史と文化—』四五号、五—二四頁。

註

- (1) 当時の植民地の呼称としてはオランダ領東インドであるが、本論が扱う一九三〇年代はすでに「インドネシア」という語がナショナリストの間では使用されており、扱う史料もインドネシアと呼んでいるため、本論でもインドネシアと表記する。
- (2) 「ペナン人性」にこゝでは、[Barnard (ed) 2004]の諸論文が様々な角度から論じているが、前近代に流動的であったマレー人性と現代の画一化された民族概念が対照される傾向があり、流動性と画一化の圧力の相克については十分に明らかにされていない。
- (3) マレー人左派は、ナショナリズムの主流派がイギリスとの協調路線でマレー人の地位向上を目指したのに対して、即時独立とインドネシアの民族主義との連携を訴えた [Aljunied 2015]。
- (4) たとえば、戦前期のマラヤのマレー・ナショナリズムに関する代表的な研究としては、[Roff 1994; Milner 1995; 2008] などがある。戦後の脱植民地化過程のマラヤとスマトラを比較した研究として [Artfin 2015]がある。なお、本論はマラヤ側からみたインドネシアに関する資料・研究に議論を限定し、インドネシア側からの視点については別稿に譲りたい。
- (5) カジャイは、一八九四年にクアラルンプル近郊のスタパク (Setapak) で生まれた。メッカに渡り、父親のもとで宗教を学んだ後、マラヤに戻ってジャーナリズムに身を投じた。ペナンの『サウダラ (Saudara)』、『ジジュリス』、シンガポールの『ワルタ・マラヤ (Warta Malaya)』、『ウトウサ

一九三〇年代のマラヤのマレー・ナシヨナリズムからみたインドネシア（坪井）

ン・ムラユ(Utusan Melayu)』など有力マレー語紙の編集にあたった。伝記として『Abdul Latif 1984]がある。

- (6) マレー語定期刊行物に関する先行研究としては、マレー語出版物全体の歴史を扱ったもの [Abdul Latif 1985]、特定の媒体に焦点をあてたものはあるが [Siti Rodzyah 2009]、媒体間の関係性を扱ったものは少ない。とくに、マラヤとインドネシアの関係性を扱った研究はほとんどない。
- (7) ハーシユマンは、マラヤのセンサスにおける人種の変遷を整理し、植民地当局が人種概念を編集していく過程を明らかにした [Hirshman 1987]。
- (8) 「親マレー人政策」の具体的な内容として、マレー人の土地保有の保護や官僚制度における登用が挙げられる [Roff 1994: 113-125]。
- (9) 英領マラヤは、直轄領である海峡植民地(ペナン、シンガポール、ムラカ、一八二六年成立)と保護領となったマレー王権を核とした九つのマレー諸州に分かれていた。
- (10) マレー半島におけるインドネシア系移民の歴史を扱った研究として、ジャワ人を扱った [Khazin 1984]、スマトラ移民を扱った [Abdul-Razagq and Khoo 2003; Abdul-Razagq 2018] などがある。
- (11) ブギス人は、もともとスラウエシ島の海洋民であったが、十八世紀にマラッカ海峡に大挙として移動し、リアウ諸島を拠点とした。スランゴル王権を立てたのはリアウの貴族の家系であった。
- (12) ここでの「マレーシア」とは、マレー群島(現在のインドネシア)の意味であり、現在の国家名称とは指す内容が異なる。

(13) 一九三一年センサスにおけるスランゴル州のマレー人の内訳

総計	マレー	ジャワ (パウエア ン含む)	スマトラ (リアウリ ンガ含む)	ボルネオ	その他 インドネ シア	オラン スリ	その他
一二万 二八六八	六万 四四三六	三万 四八一八	一万 四五七三	六三三五	二八五	二三八三	三六

出典: Vlieland 1932をもとに筆者が作成

(14) マレー語の定期刊行物は、一九三〇年代に急増した [Hamed 2002: 14]。この背景には、植民地都市の発展ともなう出版技術の普及や学校教育の拡大による識字率の向上などにより、出版業に携わる現地人が増加したことが考えられる。一九三〇年代にはいり、新聞はニュースのみならず社説に代表される政治的意見を前面に押し出すようになった [Emanuel 2010]。

(15) 一九三一年センサスでは、スランゴル州の華人の約三二%、インド人の約二三%がマラヤ生まれであった(マレー人は約七二%)。人口数でいえば、マラヤ生まれの華人は七万六七六一人にのぼっており、マラヤ生まれのマレー人八万八〇七三人に迫る勢いを示した [Vlieland 1932: 151]。

(16) 『マジユリス』のほかに、『ワルタ・マラヤ』やムラカの『スアラ・ブナル(Suara Benar)』、クランの『リダ・ブナル(Lidah Benar)』といたったマレー語紙がこの問題に論説を載せたところ [Majlis 1932: 12-8: 1]。

(17) マレー人保留地法は、「マレー人保留地」という区画を設定し、その内部においてマレー人以外の土地取引を禁じる内容であり、そのなかでマレー人が具体的に定義された

[Kratoska 1983]。

(18) 一九三一年のスランゴ州の人口は五万三一九七人であり、その内訳はマレー人一二万二八六八人、華人二四万一三五一人、インド人一五万五九二四人であった [Vieland 1932: 120-121]。

(19) 華人に対しては、彼らを管轄する専門の行政部局であり華人保護局 (Chinese Protectorate) が設けられており、インド人は労働局 (Labour Department) が管轄していた [Parmer 1960]。一方で、マレー人移民を管轄する行政部局は存在しなかった。

(20) マレー語の独立を意味する *merdeka* という単語は、もともとは「自由」を意味した。

(21) スルタン・イドリス師範学校は、一九二二年にペラ州タンジョン・マリム (Tanjong Malim) に設立されたマレー人教員養成のための学校であった。同校はマレー・ナショナルリズムの一つの拠点となった [左右田二〇〇五]。

(22) マレー人協会は、一九二六年にシンガポールで結成されたものがその最初である。その後、一九三七年にペラ、一九三八年にバハン、スランゴルなど、州ごとのマレー人協会の結成が続いた [Roff 1968: 119-123]。

(23) この記事が出された時期、『*ヴェジュリス*』の編集にはイブラヒム・ヤアコブ (Ibrahim Yaakob) が加わっていた。彼は「マレー人左派」としてマラヤとインドネシアとの合同を訴えた論客であり、この記事からは彼の思想の一端が読み取れるようである。

(名桜大学国際学群上級准教授)

The Perceptions of Malay Nationalists regarding Indonesia during the 1930s

TSUBOI, Yuji

This study examined the perceptions of Malay nationalists regarding Indonesia during the 1930s by analysing *Majlis*, a Malay newspaper published in Kuala Lumpur at that time. Historically, the Malay Peninsula and Sumatra, across the Melaka (Malacca) Straits, formed a single maritime region that connected the Malay people making the Malay language the lingua franca. However, during the 19th century, both sides were separated due to the colonisation by the British (Malaya) and the Dutch (East Indies).

In the early 20th century, when Malay nationalism had developed, the nationalists faced a discrepancy between Malay ethnicity and the polity of Malaya. Although Malays were officially regarded as natives of Malaya, there were a considerable number of Malay immigrants with Indonesian origins. These Malays faced criticism from non-Malays, such as the Chinese and Indians, since they enjoyed the same privileges of native Malays, despite their foreign origins. They further demanded the same rights as native Malays for being Malayan born. Meanwhile, the Malay papers emphasised the 'Malayness' of Indonesians both culturally and politically, and thus, reconfirmed that the Indonesians were Malays.

Malay nationalism in Malaya eventually developed separately from Indonesian nationalism, along with the formation of respective national associations. Sharing the Malay/Indonesian language, Indonesian and Malay papers referred to one another between the Malay Peninsula and Sumatra. However, their relationship was somewhat turbulent, since there was an ongoing sense of nationalistic rivalry. As a result, Malay and Indonesian nationalism, which was developed within respective political frameworks, could not be unified, despite their linguistic and cultural proximity. For the Malay nationalists, Indonesia continued to be foreign elements. In order to conceptualize a homogeneous nation through multilayered Malayness, when a discrepancy between the ethnic and the political framework occurred, the areal framework was preceded. As the result, *Majlis* promoted Malay nationalism by focusing on the assimilation of Indonesian immigrants.